

# 水稻晩期栽培における栽植様式栽植密度について

加島了相\*・平野 勝\*・飯田 晋\*

KASIMA, R., HIRANO, M., and HANDA, S. Planting Methods for the Late-sowing Rice.

水稻の晩期栽培は、栽培期間の短縮化に伴って、当然栄養生長期間の分けつに対する依存度が低くなり、穂数確保のため、栽植密度を改め高めて置く必要がある。しかし、密植することは、苗代面積や田植労力、肥培管理の場面などとの関係もあり、同時に栽植の様式も併せ考慮されなければならない。筆者等はこれらの関聯につき、1953年より3ヶ年試験を行い、結論を得たのでここに報告する。

**試験方法** 品種は農林 37号を用い、試験区は、栽植様式として、正方形植、矩形植、並木植の各区を設け、夫々坪当 80株、100株の小区とし、坪当栽植苗数を400本とする如く、1株5～4本植とした。播種は7月11日に行い、8月1日本田に挿秧した。本田の施肥量は、反当硫酸6貫、過石3貫、塩加3貫を全量基肥した。また試験区は、1区2.5坪、4区制、格子型配列であつた。

**試験成績並びに考察** 1) 本田における生育経過をみれば、草丈は正方形植区が矩形並木植区より、また80株区は、100株区より高い推移を示した。葉数は、正方形植>矩形>並木植の経過を80株区では示したが、100株区では、反対の傾向であつた。

2) 出穂成熟期は、各様式間には大差がないが、80株区は、100株区より少々遅くなる傾向を示した。稈長は、正方形植>矩形並木植、80株区>100株区(並木植区は反対)の傾向があり、穂長についても同様であつた。穂重では、正方形並木植>矩形植の傾向が80株区で認められ、100株区では主程1次葉共並木植区が重かつた。株当穂数は正方形植が他様式区より多く、坪当穂数では、100株区が80株区より少々多かつた。また一穂実粒数は、並木植>矩形正方形植の傾向が顕著であつた。

3) 収量は年次間に高い有意差が認められ、好天候

試験区別		稈長	穂長	主程重	株当数	坪当数	稈実粒数	稈歩合	反当玄米重量	比率	玄米千粒重
栽植様式	栽植密度										
正方形	株本	cm	cm	gm	本	本		%	貫	%	gm
	80.5	78.0	18.1	2.07	14.5	1160	70.1	83.8	101.3	100	21.3
	100.4	76.2	16.8	1.85	11.9	1190	66.1	87.3	100.8	100	21.5
矩形	80.5	76.9	17.5	2.03	13.5	1080	70.7	90.7	90.5	89	21.4
	100.4	74.4	16.4	1.88	10.9	1090	66.5	88.1	98.2	97	21.6
並木	80.5	74.1	17.4	2.06	13.7	1096	74.3	90.8	92.3	91	21.2
	100.4	75.1	16.7	1.95	11.7	1170	68.4	86.8	101.6	100	21.5

\* 大分縣農業試験場

年では、栽植様式及び栽植密度による収量差は少ないが、天候不良年では顕著な差を示し、正方形植が矩形植並木植より80株区では明らかな増収傾向を示したのに対し、100株区では並木植区が他の各区より多収であつた。

**結論** 1) 好天候年では、正方形植が矩形または並

木植より、穂数、穂長穂重、稔実歩合の増加により多収を示し好ましく、この場合、栽植密度は坪当80株で良い。2) 天候不良年においては、並木植が他様式より穂数、稔実歩合の向上により好結果を示し、かかる年では同一栽植苗数の場合でも、小株密植の方向をとることが有利である。